京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十一卷　第六號

論說

地租と地方團體との關係……法學博士　神戸正雄
植民地の財政政策に就きて(三)……法學博士　山本美越乃
地代課税主義土地改良論者……法學博士　河田嗣郎
生計調査を論ず……法學士　汐見三郎
價値論上のリカアドゝマルクス(三・完)……經濟學士　堀經夫

時事問題

目下の卸賣相場と小賣相場……法學博士　戸田海市

雜錄

英國現代の經濟學者と社會主義……經濟學士　三田村一郎
經濟地理學研究に對するグルーベル博士の見解……經濟學士　黑正巖
竹越氏の「日本經濟史」に就て……法學士　本庄榮治郎
石澤氏の「本邦銀行發達史」を讀む……法學士　大森研造

附錄……本誌第十一卷總目錄……

竹越氏の日本經濟史に就て

本庄榮治郎

従來の歴史研究に於ては、經濟事實の發展的研究は等閑に附せられ、歴史といへば、何人も政治外交戰爭の歴史であると考へ、或は偉人豪傑を中心として之を説き、偉人に關することは一般社會の發展に重大なる關係なき些末の點に至るまで、之を詳説し攻究するの風があつた。カーライルの如きも、歴史は英傑の傳記である(History is biography of great men)といつて居る位である。然しこれは必ずしも正當の方法ではない。史學が人類の過去の發展を研究し、個々事實の調査は、之を綜合して發展の跡を、明かにするために行はるゝものなる以上は、發展の跡を示すに足らざるものは、史學の範圍外たると同時に、苟も之を明かにするものは、政治的事實のみに限らず、經濟事實の如き亦大に攻究せなければならぬ所である。凡そ歴史上の重大事件にして、經濟的方面より研究するに非ればよくその眞相を得難きことが少くない。又往時に於ける國民生活が如何に行はれたかを知るがためには、經濟史の力によつて之を究めなければならぬ。されば經濟事實の歴史が重要であることは政治法制文教等の歴史に比して毫も讓る所なきものであつて、過去の經濟事實の發展を知ることは、それ自身に於て頗る重要なる研究といはなければならぬ。

　かくの如く經濟史はそれ自身に於て必要であるのみならず、又現在の經濟事情を知るが爲め

にも頗る必要である。蓋、現在の經濟なるものは實は過去數百年の發達の結果生じたるものに外ならざるが故に、過去に於ける來歷を知ることは、現在の經濟現象を理解する上に裨補する所あるのみならず、この歷史的經過の跡を詳にするに非れば、到底現在に於ける經濟現象の眞相を知得し難きことが少くない、かのロンドンの世界金融上に於ける地位の如きはその一例であらう。*

更に又將來の政策を樹つる上に於ても、經濟史の研究は頗る重要なものである。蓋將來の政策を樹つるに當ては、その國の事情を考慮し、過去に於ける成敗の跡に鑑み、果してよく實際に施して誤る所なきや否やを確むるに非ざればその政策は遂には一の空言となり、何等價値なきものとなつて仕舞ふからである。是れ演繹的獨斷的に論斷せられたる意見が、往々にして實行を伴ふ能はざるに至る所以であつて、又過去の事實より歸納して、その適否を定むるの必要なる所以である。卽ち經濟史はまた溫故知新の料として大に重要なるものである。

かくの如く經濟史の研究は頗る重要なるものであるが、その研究が盛んになるに至つたのは極めて新しいことである。尤、往時に於ても經濟的方面の史的研究が絕無であつたといふ譯ではなく、例へば希臘の史家Thucydidesの如き、或は司馬遷の史記に於ける如き、何れも多少經濟的方面にも留意したものであり、我國にても德川時代には貨幣史食貨志等の說述せられたるものが少くない。然し、經濟事實の研究が、特に一の專門の學科として、獨立の研究を見るに至つたのは、西洋に於ても十九世紀以後のことに屬し、我國に於ては最近時のことである。かく近時に至つて經濟史の研究が盛んとなるに至つたのは、種々の原因に依るものであらうけれども、特に經濟學が一の科學として大に發達し、從てその研究上經濟事實の沿革を調査するの必要を生じたると、社會の狀態が一變して、昔日蔑視せられておつた實業が大に重要なるものとなり、經濟上の問題が人々の注意を喚起するに

* Keynes, Scope & Method of Political Economy. p. 265-266.

至つたがため、この方面の研究が漸く重要とせらるゝに至つたことを等は、その主要なる原因であらう。*

我が國には從來一の纒つた日本經濟史も存在せなかつたといつて差支なき狀態であつた。强いて擧ぐれば横井時冬博士の日本商業史、維新後の商業史、日本工業史の三者が、廣く商工業以外のことにも論及してあり、福田博士原著坂西學士譯の日本經濟史論も純然たる經濟史ではないが先づ經濟史として參考すべきものであると一般に考へられておつたに過ぎない。寔に我が經濟史界は今猶草創の時代を脫せないものである。この時に當つて竹越與三郞氏の日本經濟史が出版された。而も菊判五千六百頁を超ゆる尨大なる冊子である。これ實に斯界の寂寞を破る雄叫びであり、空谷の跫音ともいふべきであらう。

竹越氏の日本經濟史編纂の由來はその序文に明かである。即ち曰く

今より七年前本野子爵が巴里に於て進化學者ルボンと會談したる時、ルボン氏、日本近世の興隆を以て世界の歷史に比類なき驚嘆すべき事變となし、之を以て彗星が燦爛として天體に現れたるに比す。然れども彗星は其進路に於て不規則、之に接すること危險、其陰顯の法則に於て不明なるを常とす。然れども進化の法則に合せざる日本の運命は、即ち彗星の運命にして、軈がて忽然として地平線の彼方に沒入し去るの日來らざるかを疑ふと云ふ。本野子は此疑問に對して日本は決して卒然として天體に現れしものにあらず、二千五百年の長日月を經過し、あらゆる道路を步し、一切の準備成りし後、始めて舞臺に現れたるものにして、其興隆は決して偶然にあらざるを答ふ。ルボン氏乃ち本野子を慫慂するに日本進步の道程を論じて一書を著作せんことを以てしたりしが、其後、本野子が賜暇を得て駐露大使を以て歸朝せる時、余に語るに此事を以てし（中略）大正四年の總選擧に際し余が前橋に於て候補たるや、時の執政に中てられて敗北す。朝吹君（朝吹英二氏）乃ち余に勸むるに暫らく雌伏して筆硯に親しみ、日本經濟史を著はさんことを以てし（中略）大正四年六月二十日（中略）日本經濟史編纂會なるものを發起し左の諸君の贊同を得て余をして編輯の任に當らしむ（後略）

かくて大正四年十一月に編輯局が開かれ、前後僅かに四年にして此大著述が出來上つたのである。勿論序文にも明記してある如く、此書の編纂には八人ばかりの人が各方面の仕事を分擔

* Kötzschke, Deutsche Wirtschaftsgeschichte bis zum 17 Jh. S. 2
内田博士講述、日本經濟史、26頁

しその中、五人は特殊事項の硏究に從事されたものであるが、竹越氏はこれ等の人々の論文記事等を自己の文章中に沒入混蕩されてゐるから多數者の執筆の場合に往々見るが如き、論議文章の不統一や重複衝突の弊は之を見ない。而して史料は勉めて已に世に行はるゝ著書に由らず、其第一原本に溯らんことを希圖されたといふことである。その苦心や察すべきである。

如上の經過を以て出來上つた日本經濟史八卷の中、第一卷は國初の生活狀態より初まつて北條時代に了り、第二卷は足利時代と織田時代、第三卷は秀吉の一統より德川三代將軍まで說き第四卷乃至第七卷で德川時代を說明し第八卷は凡例・總目次・挿畫・目錄・索引・物價史（物價年表）を收めてゐる。文章は三叉氏一流の輕妙なる筆致を以て文語體を採り、人をして一讀卷を措く能はざらしむるの感がある。三叉氏の「二千五百年史」が世上の歡迎を受けたと同じく、本書も亦一般世人の好讀物たることは疑なき所である。たゞ彼に比して、冊子の頗る尨大にして、

價の不廉なることは、本書の普及を、二千五百年史の如くに容易ならしむるや否やは大なる疑問であらう。

余は本誌の編輯締切期日に切迫して、本書の一部を一覽することを得たるに過ぎないから、全編に亘つて一々の內容につき、個々の事實に對して詳細なる批評又は紹介をなすの遑を有しない。たゞ二三心付いた點について述ぶることを許さるゝならば、先づ第一に述べたいことは竹越氏の經濟史なるものに對する觀念が是れである。序文によれば人は生れながらにして經濟的動物である。從つて

「人生第一の要求は經濟的存在にあるが如く、歷史の第一原因は經濟的原因にあるの一事は卽ち疑ふべからず。然れども余は歐洲に行はるゝ多くの所謂經濟史に就ては猶ほ一闕排し到らざるものあるを見る。所謂經濟史家の多くは商業制度を論し、土地制度を論し、稅制を論す、然れとも余は寧ろ是等の經濟上の制度は之を法制歷史に一任し、直ちに經濟上の觀察點より一般の歷史を說明するを以て經濟史の適當なる方法と信す。然れとも經濟を離れて政治なきが如く、政治を離れて經濟あるを得す、余は歷史の經濟的解說を施すに先ちて當

時の政治史を記載し、讀者をして經濟的解説を讀むに先ちて當時の政治的現象の概要を知らしめんと欲す。是れ此書が近時歐洲の經濟史と其體裁を異にする所以の一なりとす。」この意見は、即ち經濟史を以て、寧ろ特殊の方面即ち經濟的觀察點よりして、一國の歷史の總ての事實を研究するものなりとする説*と相同しきものである。然し通常の見解に於ては、經濟史なるものは、經濟事實の生成發展を攻究するものであつて、換言すれば特殊の事項に對する歷史的研究であつて、一般歷史を特殊の觀察點より説明するものではない。この後者に屬するもの、詳言すれば、政治・社會・人事上の重大事件が經濟的原因より起り、又は經濟的影響を受くること大なるを説明し、歷史に對する經濟要因を重視する所のものは、通常歷史の經濟的説明(Economic interpretation of history)若くは經濟的唯物史觀 (Oekonomische und materialistische Geschichtsauffassung)と稱せられてゐるものであつて**所謂經濟史とは、其趣を異にするものである。歷史上の事件に關して、經濟的原因を重視することは敢て不可なりとはいふことは出來ぬが、而も之を過重視し餘りに誇張した説明を加ふることは必ずしも正當ではない。蓋實際に於て、歷史上の事件が經濟上の原因に基くことも少くはないが、又ある場合には、政治上の理由、宗教上の理由等が、經濟上の理由よりも、寧ろ重要なることがないではない。手近な例として德川時代の鎖國政策の如き、少くとも其當初に於ては、宗教上の理由政治上の理由が、大なる部分を占めて居たものである。然るにかくの如き場合に於ても、尚之を經濟上の原因に比附するは却て一方に偏し極端に走るの譏りを免れない所であらう。それは兎に角、竹越氏の「日本經濟史」は實は「日本歷史の經濟的説明」と見るべきものであつて通常の意味における日本經濟史とは、多少性質を異にせるものであるといふことに注意せなければならぬ。

第二に、竹越氏の「日本經濟史」は國初の生活狀態から始まつて、德川時代の名目金に終つて居るが、日本經濟史又は日本歷史の經濟的説明

* Cunningham, Growth of English Industry and Commerce, Early & Middle Age. 5 ed. p. 8.

** Seligman, Economic Interpretation of History. p. 35. 62. 66. 130-134. 157.

といふもの丶性質、地位、範圍、研究方法等一般の概念については、右に揭げた序文の一節の外には詳細なる說明は存して居ないやうである。緖論としては、これ等のことも多少の說明はあつて然るべきであらう。科學的研究を高調された（序文を見よ）氏の著書としては、特に然りと思ふ。更に史料は其第一因に溯つて非常なる苦心を遂けられたといふことであるが、これ等の根本史料、又はその文書名、引用參考書名などは、一一引用されてゐるとは限らない。これは紙數の都合上已むを得ざる所ではあるが、我々學徒にとつては、最も知り度き場所が省略されてゐるやうな氣持がする。他日附錄とでもして、有益なる史料の出版を望み度い。

要するに竹越氏の「日本經濟史」は「日本歷史の經濟的說明」と見るべきものであるが、それにしても從來一の纏つた日本經濟史の存在せなかつた我學界に、この一大著述を加へたことは大に祝福すべきことであり、普通に所謂日本經濟史の研究についても多大の裨益を與へられたものと言ふことが出來やう。殊に史料の精確を期し、論議の透徹せる、文章の洗練せられたる眞に得易からざる大著述である。第八卷の末に揭けられたる物價史卽ち物價年表も一の有益なる資料を提供されたものである。我國經濟史界は玆に始めて有意義なる著述に接したものであつて、斯界に貢獻する所は甚だ大なるものがあらう。ルボン氏の彗星說が妄斷であることは言ふ迄もない所であるが、從來の誤れる日本歷史の研究、卽ち政治軍事に偏した我國の歷史から往々にして我國民が好戰國民であり、又我國の發展が武斷的軍事的方面のみに强大であつた如く考へられて居つた誤解は、本書を一讀することによつて、忽ち氷解され、我國の經濟的發達も亦大に認むべきものがあることを知らしむるに足るものがあらう。卽ち本書の出現は經濟史的研究に對しても、亦政治的意味に於ても、重大なるものである。竹越氏が大正四年の總選擧に功を奏せられなかつたことは、却て氏をして不朽の著述に名をなさしめた所以であつて、四

年間の雌伏は決して無意味なものではなかつたのである。余は茲に氏の勞を謝すると共に斯學界のために本書の出版を心から祝福するものであり、經濟史の重要、その研究の必要と、我國に於ても經濟史研究の次第に進歩しつゝあることゝを一般に認めしむる日の來つたことを欣ぶものである。